大学言語景観調査: 金沢大学・北陸大学・金沢星稜大学からの調査・比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41248

金沢大学人間社会学域経済学類
社会言語学演習『論文集』第10巻　2015年３月

大学言語景観調査

――金沢大学・北陸大学・金沢星稜大学からの調査・比較――

経済学類４年 横田 哲郎[1]

＜概 要＞

本論文は、大学における言語景観形成を金沢大学・北陸大学・金沢星稜大学の３大学から調査を実施し、その形成を明らかにしたものである。各大学において、調査範囲を絞り実際にデータを収集し、言語景観を形成する際に使用されている言語を調査していく。多言語表記の多い北陸大学、日本語・英語中心の金沢大学、日本語中心の金沢星稜大学といったように、使用されている言語を明らかにし、各大学の留学生の実態や大学の方針と照らし合わせることで、それぞれの言語景観の特徴を分析していく。分析を進めていくことで、どのようにして大学の言語景観の形成が進んでいくのか、どういった要因で外国語表記が生まれるのかを明らかにする。

＜キーワード＞

言語景観；大学；留学生；外国語

[1] yokoyoko1212@gmail.com

＜目 次＞

1. はじめに
1.1. 研究の背景・目的
1.2. 先行研究紹介
1.2.1. 多言語化と言語景観　庄司(2009)
1.2.2. 日本の言語景観の行政的背景　バックハウス(2009)
1.2.3. 言語景観における漢字使用　王(2014)
1.3. 本論文の構成

2. 研究方法
2.1. 調査対象
2.2. 調査方法

3. 調査結果
3.1. 金沢大学
3.1.1. 概要
3.1.2. 言語景観例
3.2. 北陸大学
3.2.1. 概要
3.2.2. 言語景観例
3.3. 金沢星稜大学
3.3.1. 概要
3.3.2. 言語景観例

4. 考察（それぞれの調査結果から）
4.1. 金沢大学
4.2. 北陸大学
4.3. 金沢星稜大学

5. 結論

1. はじめに

1.1. 研究の背景・目的

私たちの暮らす社会は言語であふれている。その言語は話し言葉だけではなく、読む・読まれることで重要な情報伝達の役割を果たすことができる。言語は私たちの生活の場に商店の看板や案内板、注意書き等の景観としてあらわれ、その国や地域・町の文化を形成する大きな役割を持っている。

これら公共空間で目にする書き言葉は「言語景観」という概念で呼ばれている。英語では“linguistic landscape”と表され、カナダの言語学者 R. Landry と R. Y. Bourhis が「特定の領域あるいは地域の公共的・商業的における言語の課しかと顕著性」と定義している(バックハウス, 2013, p.9)。

この「言語景観」という概念は現在までさまざまな角度から調査・研究が行われてきている。その中でも日本の言語景観調査の原点は、バックハウス(2013)では、1962 年の正井康夫の「新宿の都市言語景観」の調査であったとされている。調査の動機は「当時の新宿は外国語にありふれた街であった」ことである(p.9)。
この調査では店名看板を対象に、言語・文字・業種などを分析した。

その後、正井の調査に続きさまざまな人物が同様の調査・研究を行ってきた。いずれの結果からも日本の言語景観にひとつの大きな特徴がみられた。それは言語の「西欧化」である。1962 年の正井の調査の時期前後から現在までにかけて言語の西欧化は着実に進んでいた。初期には商店の名前などの表記が中心であったが、その傾向は徐々に変化していった。その主となる変化は、外国人のための言語景観の出現である。商店の名前などは主に日本人中心の言語景観であったことに対して、国や自治体が設置するものを中心に多言語表記が増えていった。例としては、道路標識や地図、公共施設での案内板などが挙げられる。

これらの言語景観調査から日本における外国人居住者、観光客の数が増え、国際化が進んでいることが簡単に予想できる。

この背景にあるのは、1954 年頃から始まった高度経済成長である。この高度経済成長にともない、日本では外国人居住者が急増するなど、国際化が急速に進んだ。かつて日本を訪れた外国人は観光やビジネス、留学などの短期滞在がメインであったが、高度経済成長の影響により、アジアや南米から仕事を求めて日本にやってくるというパターンが急増した。日本での外国人居住者が増えれば、日本の言語景観が国際化し、

外国語表記が増えるのは当然であると指摘されている（庄司, 2009)。

日本の言語景観の国際化は、当初外国人労働者に向けたものから広がっていった。しかし近年では長期滞在を含めた、留学・研究など学術的に日本を訪れる外国人が増えている。日本では現在、世界の中でも東アジアを中心にアジア諸国からもっとも多くの留学生を受け入れている。2013年5月時点での留学生受け入れ総数は135,519人であり、出身国では中国で一番多い81,884人、次いで韓国で15,304人となっている。日本の留学生の受け入れは計画的に実施されている。優れた留学生を獲得し、各国の人材育成への貢献や日本の経済発展、科学技術の進化、学術の発展、世界で活躍できる人材の育成などを目的とし、戦略的に行われている。実際に日本で一番留学生受け入れの多い早稲田大学では2005年から2011年にかけて、留学生受け入れ人数は約2倍になっている（早稲田大学HP（http://www.waseda.jp/top/）より）。

日本にやってきた留学生は出身が違えば主として使用する言語も多種多様である。さらには、個人個人の日本語をはじめとした言語レベルも違うはずだ。そのような状況からどのようにして大学をはじめ周辺地域における言語景観は形成されるのだろうか。

言語景観の形成については多くの研究がなされており、庄司博史は日本の言語景観の形成を多言語化と表現した。英語を中心とした多言語表記は公共・民間両者において進んでおり、かつての商店などの装飾的表記と案内などの便宜的表記の差はほとんどないとした。また、庄司博史によると、「これらは、外国語が社会の中に定着し、仕様が拡大しつつあることの反映であると同時に、多数派である日本人にとっては、多言語化がつよく印象付けられる要因となっているともおもえる。」（庄司, 2009, p.40）とも述べている。一方で、ホストである日本人社会側からの外国人を対象とした多言語かした言語景観の設置は少ないが、外国人支援組織によって多言語化が進行していることが指摘されている。

しかし、大学という空間では前述されたような研究の状況とは違ってくる。日本の大学を訪れる外国人留学生は主に学術的な目的を持っている。言語景観の多言語化は、外国人留学生の数を考えると当然増加することが予想されるが、留学生の目的を要素に入れると日本語以外の言語がかつてと同様に言語景観の中に割り込んでくるとは考えにくい。

そこで本研究の目的は、大学における言語景観の特徴を明らかにし、かつて研究されてきた日本の言語景観との違い、また大学で形成される言語景観の状況の違いを、身の回りの大学を中心に調査・研究することとする。

1.2. 先行研究紹介

言語景観についての調査・研究は以前から調査がなされてきた。そのうち今回の論文の調査に関するものをいくつかを紹介したい。

1.2.1. 多言語化と言語景観 庄司(2013)

多言語化の条件は、外国人の増加にともなう外国語の存在のみではなく、多数派言語話者との接触の形態、多数派言語話者による移民言語の認知と受容、さらにホスト社会による移民言語話者への保護的政策が重要であるとした。そこで多言語化を発信者、場所、機能などいくつかの側面から考察した。

英語を中心とする装飾的表示はかつてから盛んであり、外国人旅行者にむけた公共交通機関やホテル、商店などでの英語表示もかなり進み、装飾面・便宜面での表示に以前ほどの差はなくなってきている。

一方で､在住外国人を対象とする英語表記も 1990 年代はじめから徐々に増え始めていった。そのうちのひとつは、外国人自身による商店名や看板の表記であった。

これらは外国語が社会に定着していることの反映であると同時に多数派である日本語話者にとっても多言語化が印象付けられる結果となっていた。しかし公的機関以外の、地域住民や私企業からの外国人住人に対する多言語化はまだ限られたものであった。公的機関が多言語化を進めることでホスト社会である日本人の多言語化支援の増加が期待される。

多言語化においては、社会における外国語の認知や政策的
受容が重要であり、自言語中心の言語観の相対化とともに、民族や国家の境界線の再検討を
うながすことにある。認知と受容の指標としての意識の調査がかかせないものとなる。

1.2.2. 日本の言語景観の行政的背景 バックハウス(2013)

この研究では、公的表示についての公的ガイドラインを検討し、東京都または 23 区による多言語表示の提供の通時的展開をたどってきたものである。

公的表示のもっとも重要な外国語は英語である。さまざまなレベルの行政機関にとって国際化に対応するために英語は必要不可欠なものであるとみなされている。そのため和英併記は 1991 年の東京都公的サインマニュアル（東京都情報連絡室 1991）およびそれ以降のすべての文章

の中で、必要条件としてみなされてきた。

中国語と韓国・朝鮮語は、東京の公的表示において英語の次に重要な言語として用いられている。在日中国人および韓国人が日本で比較的長い歴史をもつにもかかわらず、これらの言語が公的表示に現れるのは英語とローマ字の表記が登場するよりも最近の出来事であった。これらの言語が公的機関で表示されはじめたのは1980年代末から1990年代初頭にかけてである。「外国人にもわかりやすいまちの表記に関するガイド」（東京都生活文化局2003）においては、日本語、英語、中国語、韓国・朝鮮語を優先して使用することを是認している。街中にみられる中国語、韓国･朝鮮語の表記はほぼ半分が公的機関によるものであった。

多言語表記以外にも外国人のために「やさしい日本語」で言語表記する方法が論じられている。ふり仮名をつける、漢数字ではなくアラビア数字を使用するなどがある。ほかにはピクトグラムの使用によって表示することもある。

東京都の行政機関はガイドラインの作成とともに、日本語以外の言語景観の増加につとめてきた。世界における言語政策では外国語の締め出しのほうが多いことを鑑みると、東京都は外国語に対して寛大であることが考えられる。これが特に現れているのは今日第2言語として使用されている英語より、東京のもっとも数多い外国人人口が実際に第一言語として話している中国語と韓国・朝鮮語の公的表示である。

1.2.3.　言語景観における漢字使用　王(2014)

この調査では台北・香港・上海・北京という4地域の言語景観における慣用表現の実態を調査することで言語景観における慣用表現のバリエーションを考察している。

香港・上海・北京においてバーなどが集中する地域と商店街に分け、6つの地域でのデータを収集した。その結果、台北では日本語表記が多用されていることが分かった。香港ではアルファベット表記を多用することによってバーの集中地域という雰囲気を生み出すことを狙っていると考えられる。上海では新しく開発が進められ、バーなどが集中する地域ではアルファベットが優勢、一方で、昔ながらの商店街の地域では漢字優勢であるといった結果も判明した。

機能面での調査では、場所や場面によって言語表現の機能の違いがあることが判明した。開放的な空間では駅構内などに比べて直接的で強力な言い方が用いられ、言語景観の受け手に対する丁寧な配慮はないが、直接的でわかりやすいという配慮がみられる。高電圧に対する注意を呼

びかける場合も、「内進（中に入る)」や「靠近（接近）」、「有电危险（高電圧あり危険）」のように異なる表現が使用されていた。禁止に関する表示にもさまざまな表記が存在している。

1.3. 本論文の構成

本論文の構成は次のようになっている。

第 2 章では、この研究の調査方法や研究対象を詳しく述べる。

第 3 章では、調査結果をグラフや写真を用いて掲載する。

第 4 章では、調査結果から評価、考察を行う。

最後に第 5 章では、本論文の結論を述べる。

2. 研究方法

2.1. 調査対象

「大学内における言語景観」を調査するにあたり、本研究では石川県内の大学である金沢大学・北陸大学・金沢星稜大学の三つを指定した。三つの大学はそれぞれ違った特徴があり、言語景観にもその特徴があらわれると予想した上で指定した。まず、それぞれの大学の特徴を簡単に紹介する（各大学 HP より)。

① 金沢大学(http://www.kanazawa-u.ac.jp/ 平成 25 年 5 月 1 日)
地域と世界に開かれた教育重視の研究大学

② 北陸大学(http://www.hokuriku-u.ac.jp/ 平成 25 年 5 月 1 日)
グローバルな視野を持って 21 世紀の文化・社会を切り開くことのできる人材の育成

③ 金沢星稜大学(http://www.seiryo-u.ac.jp/u/ 平成 25 年 5 月 1 日)
社会に役立つ人材・地域とともに歩む大学

これら三つの特徴をみると、金沢大学・北陸大学では大学の国際化を推進していることが考えられ、言語景観にも多言語表記が多くみられることが予想される。一方で金沢星稜大学では、地域中心の大学としての教育を進めていることから他の二つの大学とは違った結果が見られることが予想される。

2.2. 調査方法

この調査では、収集した言語景観データにおける使用言語・景観の性格を分析する。実際の調査では各大学の建物内部一階を中心に、言語景観を写真に収めることとした。写真枚数に制限は設けず、見つけることのできる言語景観全てを撮影対象とした。

撮影対象は、案内板・指示板・注意書き・掲示板・掲示物・その他言語表記されている物とする。ただし、同様の内容のものは対象外とした。

収集した言語景観のデータを分析した後、各大学における言語景観の比較研究をおこない、実際の大学データをもとに分析を進める。各大学の実際のデータは、大学 HP または大学への直接の問い合わせを行う。

3. 調査結果

3.1. 金沢大学

3.1.1. 概要

まず、金沢大学の調査では、人間社会学域棟、自然研本館、総合教育棟の一階に範囲を絞って調査を実施した。結果は下の表の通りである。

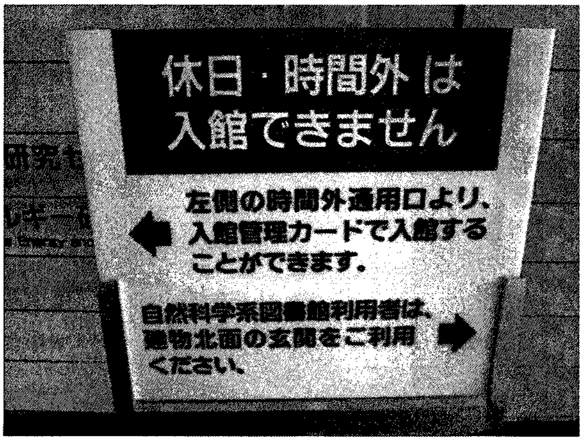
日本語	46 枚
英語	25 枚
3 カ国語以上	0 枚
合計	71 枚

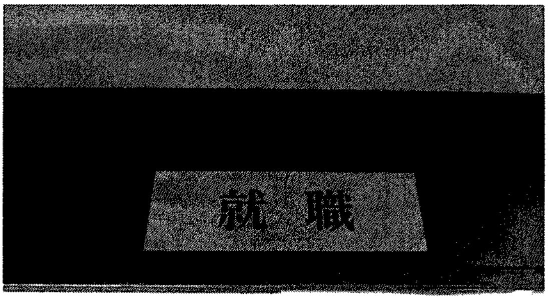
金沢大学の構内では、日本語と英語の表記中心の言語景観が構築されていた。ほかの言語は今回の調査範囲内では見ることができず、留学生向けの掲示板では、日本語の他には英語表記のものだけであった。しかし留学生向けの掲示板の漢字にはふりがながされており、やさしい日本語としての留学生への配慮が見られた。日本語の枚数が英語の約 2 倍という結果からも単純に日本語中心の言語景観だということがわかる。

機能面から見ると、案内や注意事項などの看板においても、日本語のみのものもあれば日本語と英語の二ヶ国語表記のものもあった。

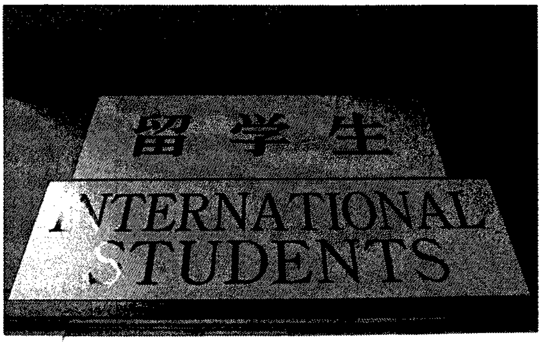
3.1.2. 言語景観例

次の3枚の写真は基本的に日本語のみの表記による例である。





次の３枚は日本語と英語の２ヶ国語表記による写真例である。



3.2. 北陸大学

3.2.1. 概要

まず、北陸大学では、太陽が丘キャンパス一号棟と二号棟の一階中心に一階に範囲を絞って調査を実施した。結果は下の表の通りである。

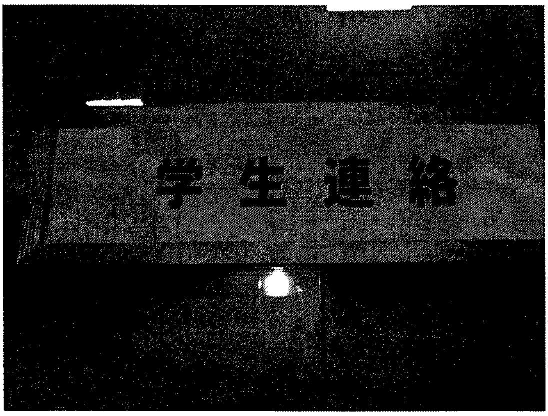
日本語	64 枚
英語	6 枚
中国語	8 枚
日本語＋英語	16 枚
日本語＋中国語	5 枚
日本語＋英語＋中国語	4 枚
合計	104 枚

北陸大学の調査では、日本語、英語、中国語の三ヶ国語の言語景観を見ることができた。結果の表からもわかるように日本語以外の言語で表記されているものが 40 枚あった。金沢大学の調査と同様に留学生向けの掲示板等も設置されており、こちらでは外国語のみの表記も多く見られた。さらには漢字に対してはふりがなもあり、留学生に対する配慮が施されていた。注意事項などに関する言語景観に関しては、日本語のみのものよりも圧倒的に外国語が併記されているものが多かった。こちらも留学生に対する配慮がうかがえる。

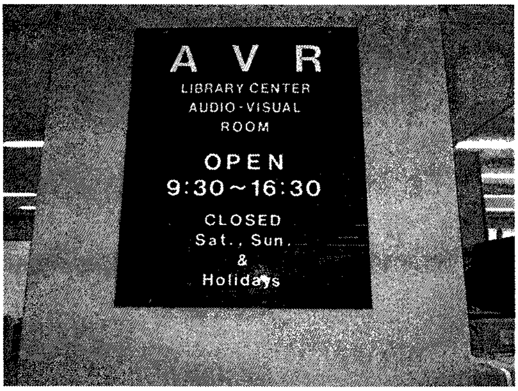
全体的に英語・中国語といった外国語の多さが目立ち、普段私たちが生活する空間とは違った言語景観の構成が進んでいた。

3.2.2. 言語景観例

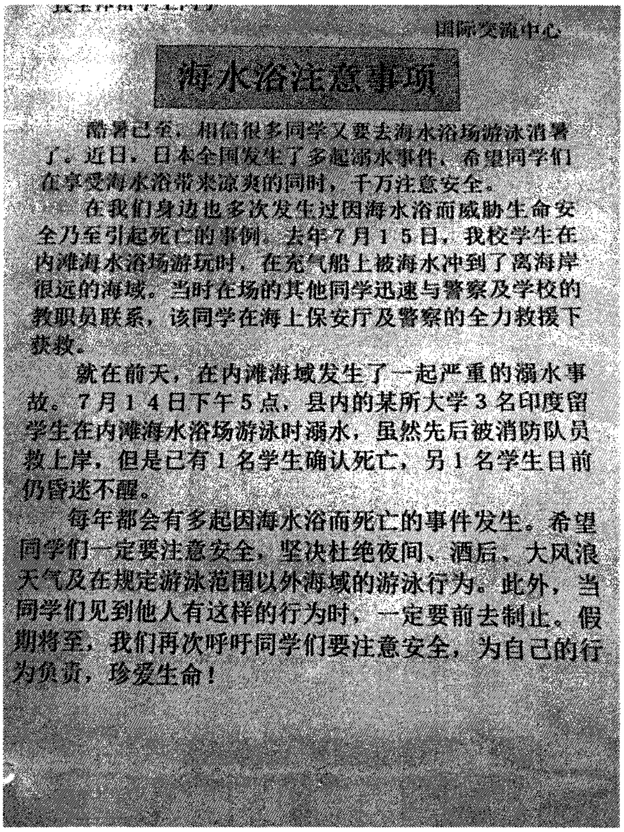
次の写真は、日本語のみの表記による例である。



次の写真は、英語のみの表記による例である。



次の写真は、中国語のみの表記による例である。



国际交流中心

海水浴注意事项

酷暑已至，相信很多同学又要去海水浴场游泳消暑了。近日，日本全国发生了多起溺水事件，希望同学们在享受海水浴带来凉爽的同时，千万注意安全。

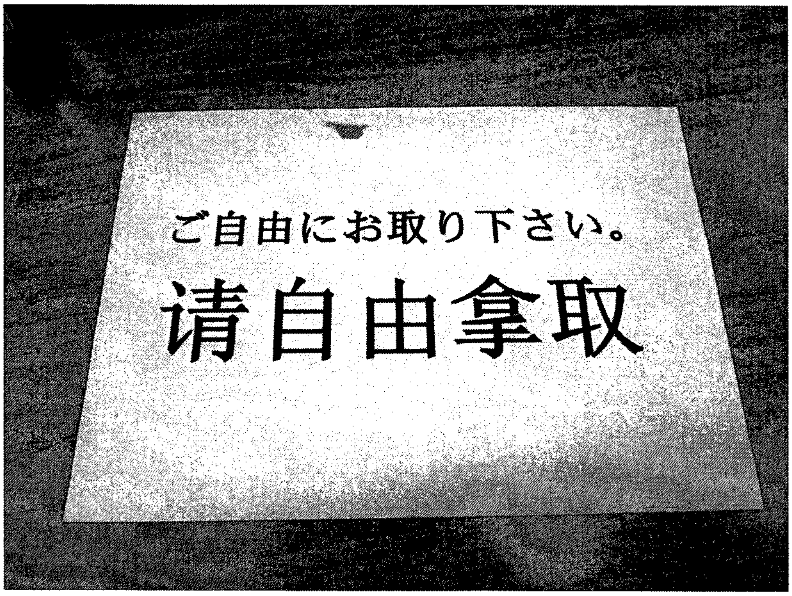
在我们身边也多次发生过因海水浴而威胁生命安全乃至引起死亡的事例。去年７月１５日，我校学生在内滩海水浴场游玩时，在充气船上被海水冲到了离海岸很远的海域。当时在场的其他同学迅速与警察及学校的教职员联系，该同学在海上保安厅及警察的全力救援下获救。

就在前天，在内滩海域发生了一起严重的溺水事故。７月１４日下午５点，县内的某所大学３名印度留学生在内滩海水浴场游泳时溺水，虽然先后被消防队员救上岸，但是已有１名学生确认死亡，另１名学生目前仍昏迷不醒。

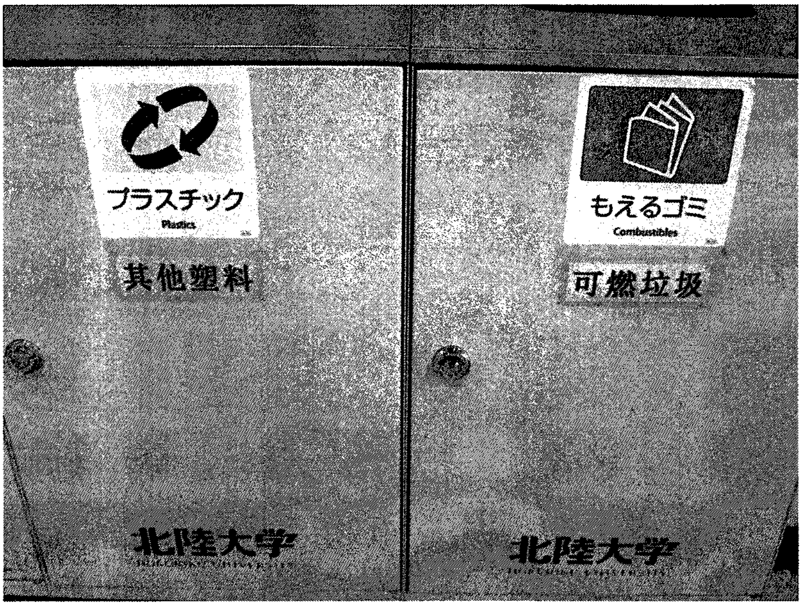
每年都会有多起因海水浴而死亡的事件发生。希望同学们一定要注意安全，坚决杜绝夜间、酒后、大风浪天气及在规定游泳范围以外海域的游泳行为。此外，当同学们见到他人有这样的行为时，一定要前去制止。假期将至，我们再次呼吁同学们要注意安全，为自己的行为负责，珍爱生命！

次の写真は、日本語と英語の二ヶ国語表記の例である。

次の写真は、日本語と中国語の二ヶ国語表記の例である。



次の写真は、日本語、英語、中国語の三言語表記の言語景観である。



3.3. 金沢星稜大学

3.3.1. 概要

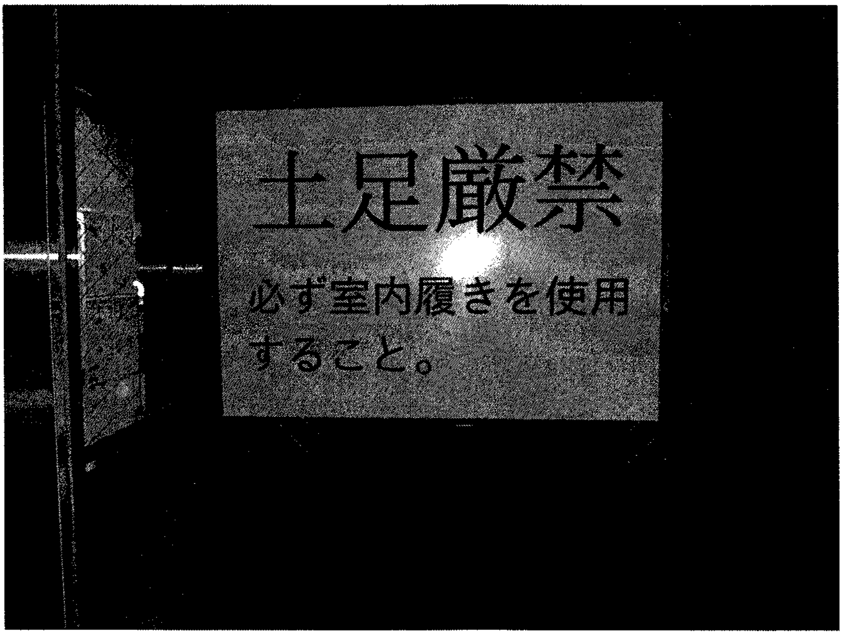
まず、金沢星稜大学では、大学キャンパス全域一階に範囲を絞って調査を実施した。結果は下の表の通りである。

日本語	41 枚
日本語＋英語	9 枚
合計	50 枚

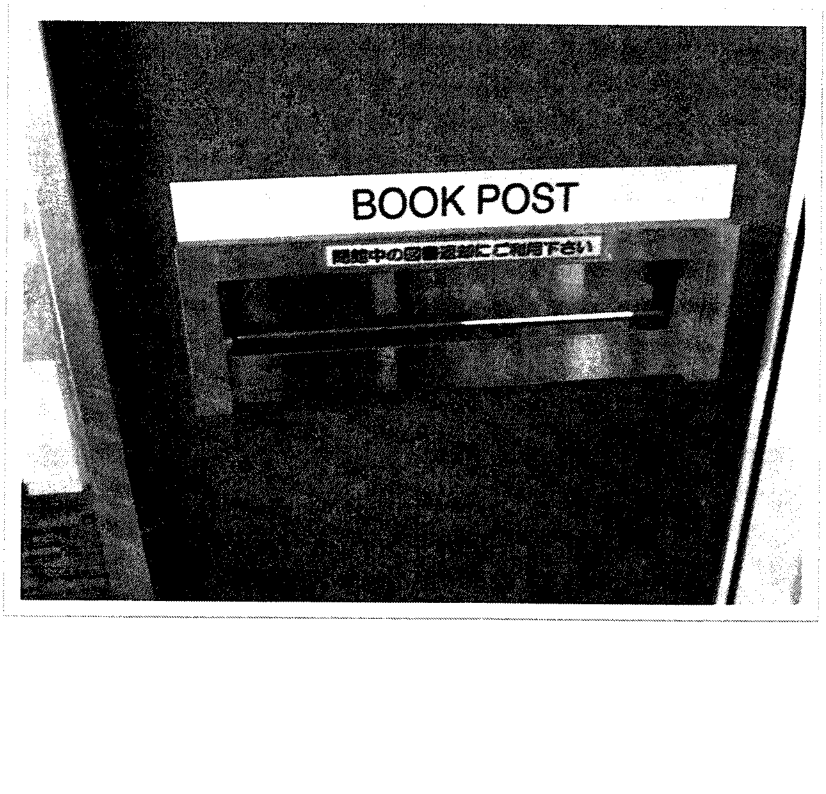
金沢星稜大学での調査では、日本語と英語の言語景観しか見ることができなかった。50 個のデータの中で 41 個が日本語といったように、ほとんどの言語景観が日本語のみであり、どの言語景観にもかならず日本語が表記されていた。注意や案内の機能を持つ言語景観も日本語が中心であり、英語で表記されているものは必要最低限のものであった。また、留学生向けの掲示板がほかの 2 大学では見ることができたが、金沢星稜大学では留学生向けの掲示板が存在しておらず、外国語の言語景観が形成される要素を発見することができなかった。

3. 3. 2. 言語景観例

次の二枚の写真は日本語のみの表記の言語景観である。



次の二枚の写真は、日本語と英語の二言語表記の言語景観である。



4. 考察（それぞれの調査結果から）

4.1. 金沢大学

金沢大学での調査では、日本語と英語の二種類の言語景観しか収集できないという結果に終わった。留学生向けの掲示板でも日本語と英語のみであり、シンプルな言語景観の構成であった。

しかし、ここで金沢大学の留学生の内訳を表で見てみよう。

	学士	大学院修士	大学院博士	研究生その他
留学生数	59	142	172	124
インド	0	0	2	1
インドネシア	0	31	40	1
シンガポール	0	0	0	1
タイ	2	2	8	5
パキスタン	0	0	0	1
バングラデシュ	0	0	11	0
フィリピン	0	1	1	0
ベトナム	1	11	22	5
マレーシア	8	1	7	1
ミャンマー	0	0	1	2
モンゴル	1	1	4	0
韓国	9	4	5	11
台湾	0	0	4	5
中国	37	85	47	46
イラン	0	2	5	0
サウジアラビア	0	0	1	0
オーストラリア	0	0	0	6
ウガンダ	0	1	0	0
エジプト	0	0	3	0
ケニア	0	1	2	0
イギリス	0	0	0	4

イタリア	0	0	1	1
スペイン	0	0	0	2
チェコ	0	0	0	2
ドイツ	0	0	0	7
フィンランド	0	0	0	3
フランス	0	0	0	1
ベルギー	0	0	0	4
ポーランド	0	0	0	2
リトアニア	1	0	0	0
アゼルバイジャン	0	0	1	0
ベラルーシ	0	0	2	1
ロシア	0	1	5	3
アメリカ	0	1	0	6
メキシコ	0	0	0	1
ブラジル	0	0	0	2

（平成 25 年 5 月 1 日　金沢大学への問い合わせにて）

この金沢大学の留学生の内訳を見ると、アジア中心ではあるが世界各国から留学生が来ていることが分かる。英語圏外の国々からの留学生が圧倒的に多いにもかかわらず、金沢大学では、日本語と英語の言語景観しか見られないことには、留学生のレベルが関係していると考える。

金沢大学で形成されている言語景観には機能面から見ても日本語中心であり、かつ英語も必要なものにしか使用されていないのは、留学生の語学レベルが非常に高いレベルであることが予想される。金沢大学が「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を目指していることからも留学生に対して、高いレベルを要求していることがうかがえる。しかし、同時に留学生向けの掲示板の設置等で留学生に対する配慮もあり、留学生が認識できる最低限の言語景観の形成という、高い語学レベルでの言語景観の形成が金沢大学では進んでいるといえる。

4.2. 北陸大学

北陸大学では、日本語と英語、中国語の三言語の言語景観で構成されていた。やはり、北陸大学でも日本語が多く見られたが、英語のほかに

中国語がある程度みられ、金沢大学に比べると外国語の多さが目立った。
ここで、北陸大学の留学生数の内訳を表で見てみよう。

	薬学部	未来創造学部	大学院	留学生別科
全学生数	1,061	1,081	1	44
留学生数	0	524	1	44

(平成25年5月1日　北陸大学への問い合わせにて)

この表から分かるように、未来創造学部では全学生数の半分が留学生で構成されている。さらに留学生別科という科が設置されていることが分かる。留学生別科とは、北陸大学が国際環境を踏まえて、留学生の積極的な受け入れを狙い設置したものである。この留学生の多さからも全体の言語景観の約4割に外国語が表記されている理由がわかる。

北陸大学の特徴として中国語の多さがあるが、これは留学生のうち中国人留学生が多いことがうかがえる。

北陸大学では英語のみ、中国語のみといった外国語のみでの言語景観が見られたことが特徴的であった。金沢大学と比較してみると、こちらの大学では言語レベルがある程度低くても留学を受け入れていることが予想される。留学生向けの掲示板でもより多くの外国語がみられ、留学生への配慮がより強く施されていることが分かる。

北陸大学では「グローバルな視野を持って 21 世紀の文化・社会を切り開くことのできる人材の育成」を目指しており、低い語学力でも留学生を受け入れるように言語景観を整備していった結果、このように英語と中国語の言語景観が形成されたと考える。

4.3. 金沢星稜大学

金沢星稜大学の調査では、日本語と英語の二言語の言語景観しか見られなかった。しかも50個のデータの中で41個が日本語のみの言語景観であり、日本語の多さが目立った。英語で表記されていた言語景観も最低限の注意の機能を持つものに対してのみであり、あきらかに日本語中心の言語景観形成であった。

ここで、金沢星稜大学の留学生の内訳を表で見てみよう。

	経済学部	経済学部二部	人間科学学部	大学院
全学生数	1,730	7	493	19
留学生数	46	0	0	3

この表の留学生の内訳は、下の表の通りである。

中国	ロシア	タイ
89.80%	8.20%	2.00%

（平成 25 年 5 月 1 日　金沢星稜大学への問い合わせにて）

この二つの表から分かるように、留学生数はほかの二つの大学に比べて圧倒的に少なく、その内訳も 90%近くが中国からの留学生という内訳である。ここから外国語の言語景観の圧倒的少なさの理由がうかがえる。そのためほかの二つに大学では、留学生向けの掲示板等が設置されていたが、金沢星稜大学では留学生のための掲示板などが設置されておらず、留学生に対する配慮はほとんどない。

金沢星稜大学では「社会に役立つ人材・地域とともに歩む大学」を目指しており、ほかの二つの大学に対してこちらでは地域に向けた大学造りをしている。そのため、圧倒的に日本語の多い、外国語のほとんどない言語景観の形成が進められているのであろう。

5.　結論

本研究では、金沢大学・北陸大学・金沢星稜大学の言語景観を使用されている言語に着目して調査、研究を行った。金沢大学では、アジアを中心に世界各地から留学生が訪れており、高い語学レベルを要求しているため、留学生の母国語ではなく、日本語・英語の二言語中心の言語景観形成であった。北陸大学では、圧倒的留学生数を誇り、留学生のための学科も用意されていた。そのため、あらゆるレベルの学生を受け入れるため、日本語・英語・中国語そのなかでも英語・中国語がほかの調査大学と比較しても多く、より多言語での言語景観形成が進められていた。金沢星稜大学では、留学生がほとんどおらず、調査でみられた言語も圧倒的な割合で日本語であった。外国語も必要最低限の英語のみであり、日本語中心の国内学生向けの言語景観形成であった。

これらの結果は、第二章で紹介した各大学のスローガンの通りの言語景観形成といえるだろう。「世界に向けた」、「グローバル」を意識した金沢大学と・北陸大学、「地域とともに歩む」金沢星稜大学ではそれぞれ、大学の言語景観を形作るテーマを元にそこで勉学に励む学生に対する言語景観をつくるよう配慮しているものである。

本研究では、ある程度予想通りの結果を調査で得ることができた。し

かし、調査範囲を絞っているため、発見できなかった言語がある可能性がある。調査範囲を絞ることでも、大きな傾向をつかむことは可能であるがさらに細かく分析するためには、今後の課題のひとつである。さらに、各大学でみられた言語景観は、大学の方針のもとで意識的に形成されてきたのか、無意識に自然に形成されたのかが分からず、大学の言語に関する取り組みや実際に留学生が今の言語景観で不便のないように学生生活を遅れているかのヒアリング調査を行う必要もでてきた。この問題を解決することで、大学の言語景観調査をこれからの大学の言語景観形成の取り組みに活かすことができるだろう。

参考文献

・王 一帆(2014).「言語景観における漢字表記 台北・香港・上海市・北京市の調査から」. 平成 25 年度金沢大学修士論文.

・庄司 博史、P・バックハウス、F・クルマス編(2009).『日本の言語景観』三元社.

・庄司 博史(2009).「多言語化と言語景観―言語景観からなにがみえるか」. 庄司・バックハウス・クルマス編(2009), 第 1 章(pp. 17-52).

・P・バックハウス(2009).「日本の言語景観の行政的背景―東京を事例として」. 庄司・バックハウス・クルマス編(2009), 第 6 章(pp. 145-170).